

第24回 河川生態学術研究発表会

自然環境グループ 研究員 内藤 太輔

1. はじめに

当研究所が事務局を務める河川生態学術研究会(以下、研究会)と応用生態工学会とで共催する「第24回 河川生態学術研究発表会」が令和4年11月15日にAP 浜松町にてオンライン併用のハイブリッド形式で開催されました。

新型コロナの影響を踏まえて、会場とオンラインを併用するハイブリッド開催としましたが、遠方からの参加が可能になったこともあり、約300人と多くの参加がありました。

この研究会は、平成7年に生態学と河川工学の研究者が共同して創設したもので、河川における生態系の解明とその上に立った河川管理について研究、議論するとともに、次世代を担う研究者を育成することを目的に取り組みを進めています。

2. 研究発表

プログラムの前半では、5つのプロジェクト研究グループによる研究発表が行われました。研究グループは、生態学と河川工学の研究者の連携が共通の大きな特徴です。概ね5年の研究期間でそれぞれ異なる研究テーマとフィールド河川で研究していますが、河川生態に関する最先端の幅広い研究内容を一度に知ることができるのが発表会の大きな魅力となっています。

事後のアンケート結果では、特に筑後川、木津川の研究グループのご発表に多くの関心が集まりました。

研究グループの発表 ※敬称略
千曲川研究グループ / 代表 箱山 洋 「河川における生息地連続性の重要性」
筑後川研究グループ / 代表 鬼倉 徳雄 「平成29年九州北部豪雨により土石流攪乱を受けた溪流の生態系変化」(一柳 英隆) 「平成29年九州北部豪雨とその後の中小河川改修が魚類に及ぼす影響評価」(皆川 朋子)
狩野川研究グループ / 代表 塚越 哲 「放水路上下流の流れのレジューム」(森 康二) 「粒度組成と断面形状に見る狩野川中下流域の特徴」(知花 武佳)
木津川研究グループ / 代表 竹門 康弘 「伝統的河川工法を用いた木津川の河床地形管理手法に関する研究」(竹門 康弘) 「聖牛により創出された低水敷一時的水域の環境特性と生物群集」(片野 泉)
石狩川・十勝川研究グループ / 代表 中村 太士 「気候変動下における河川生態系のレジリエンスー 河川構造、生物多様性、生態系機能 に着目して」(中村 太士) 「流域内の水温異質性が冷水性魚類の遺伝子流動に与える役割」(中島 颯大) 「河川-陸域生態系間の連結性における湧水河川の重要性：季節間および大規模かく乱後の補償効果に着目して」(赤坂 卓美)

3. 話題セッション

プログラムの後半は、「河川生態学術研究会の政策提言」をテーマにパネルディスカッションが行われました。研究会では萱場教授(名工大)を代表とする政策提言ワーキンググループを設置し、これまでの研究成果を基にした政策提言の作成を進めています。今回の話題セッションではそのドラフト案が示され、参加者も含めて活発な意見交換がなされました。

環境への意識の希薄化、流域治水が進められることによる期待と不安など、背景となっている課題から、提言の内容・構成・分量に関する事、実行性を持たせるために政策提言のタイミングや主体の明確化を検討することなど幅広い意見が出されました。

事後のアンケート結果でも今回最も関心の高いプログラム項目となり、政策提言を進めてほしいという声やそのための行政とのコミュニケーションの必要性に関する意見が多く寄せられました。また、災害復旧で環境への対応を導入していくことについても多くの意見がありました。

話題セッション ※敬称略
コーディネーター： 島谷 幸宏(熊本県大)、中村 太士(北大)
パネリスト： 萱場 祐一(名工大)、平林 公男(信州大)、 知花 武佳(東大)、皆川 朋子(熊大)、 一柳 英隆(熊大)



図 政策提言の議論をする話題セッションの様子

4. おわりに

当研究所では引き続き運営を介して研究会の活動を支えるとともに、研究発表会やウェブページ、SNS等で河川生態や河川管理に活用できる情報を発信していきます。次年度の公表を目指す政策提言についても作成支援や、行政との橋渡しなど社会実装の部分でも積極的に関わっていきます。